

## 周縁での対話——映画『What About China?』（トリン・T・ミンハ、2022）

トリン・T・ミンハ監督最新作『What About China?』（ホワット・アバウト・チャイナ？）上映  
2023年10月13日 会場：名古屋大学東山キャンパス 文系総合館7階 カンファレンスホール

李芸濃

2023年10月13日に、監督であり大学教授でもあるトリン・T・ミンハ（Trinh T. Minh-ha）が、最新の映画作品『What about China?』を携えて名古屋大学に招待された。このイベントは、映画上映と、小川翔太准教授および長山智香子准教授を交えたラウンドテーブル形式の講演から構成されていた。日本では1990年代からトリン・T・ミンハの著作が翻訳されてきたが、彼女の映画の上映は通常、美術館や映画祭で行われることが多かった。したがって、キャンパスでトリン・T・ミンハ監督の映画を観ることで直接話をするのは、貴重な機会だった。

1952年に北ベトナムのハノイで生まれたトリン・T・ミンハは、幼少期を南ベトナムで過ごし、ベトナム戦争終結の5年前にアメリカ合衆国に移住した。イベント案内で引用されているように、監督は「当初、作曲家になる訓練を受けた彼女は、アーティスト、映像作家、作曲家、フェミニスト、そしてポストコロニアル理論家として、ジェンダー、植民地主義、移住、映像詩学についての数々の言説の配置を生み出してきた。」<sup>1</sup>。私は彼女の「speak nearby」（他者の近くで語る）という理論を通じて、初めてトリン・T・ミンハの作品に触れた。彼女の最初の映画『Reassemblage』（ルアッサンブラージュ）（1982年）は、セネガルの農村部の人々の日常生活についての民族誌的映画であり、ナレーションで「I do not intend to speak about, just speak nearby」（私は他者を語りたいのではなく、ただ他者の近くで語るだけだ）と述べている。このアプローチは、主題についての真実や現実を表現しようとするのではなく、より親密で、内省的で、間接的な方法で主題に関与する。これは、制作者を他者について語る権威の立場から解放し、知識生産の階層構造から離れる方法であり、真実の多面性を探求することは、彼女の作品全体を通じて響き渡るテーマだ。『What about China?』においても、トリン・T・ミンハは自身をアウトサイダーとして位置づける。彼女の周縁における立場を明確にするため、彼女は一連の疑問—「どの、いつの、どこの、どの

ような、そして中国についての何を？」—から映画を始め、権威ある全知全能の視点から中国という複雑な実体に近づこうとしているわけではないことを明確にする。つまり、彼女は中国についてこれらの質問に答えようとしているのではなく、自分自身の内部にある他者を正直に示そうとしているのだ。

『What about China?』は、上海のロックバンド美術館（RAM）とシンガポールのNTU現代美術センター（NTU CCA）が共同で委託した、彼女の最新のアート作品だ。この映画は、主に1993年から1994年の間に、彼女がジャン・ポール・ブルデューと中国で行った伝統的な民家建築に関する調査の際に、撮影したHi8フットー지를使用している。古いフットー지를再訪するこの行為は、現代アートにおける「アーカイブ的衝動」というハル・フォスター（2004年）<sup>2</sup>によって名付けられた概念を私に思い起こさせる。この衝動では、アーティストは既存の素材を再利用し再解釈するだけでなく、歴史、記憶、文化保存のメカニズム、そして物語構築の概念とも批判的に関わる傾向がある。アーカイブ映像を再利用し、線形の歴史的時間と秩序を崩すことによって、新しいつながりと解釈のための空間が生まれる。135分間のこの映画では、トリン・T・ミンハは30年前のビデオを再編集し、再創造することによって、時間と空間を超越した感覚的体験を観客に提供している。

映画は福建、湖南、浙江、安徽などの南部の省をまたがり、福建土楼や徽州建築などの民俗建築を紹介している。カメラは建物の構造に向けられるだけでなく、そこに住む人々にも焦点を当てている。映画には、馴染みのある中国の民俗歌曲と、時には映像に合わせた、時にはそうでない複数のナレーターの声が挿入されており、断片化された多層的なナラティブを生み出している。言い換えれば、意味を求めることなく音と声を敢えて分離することは、より深い感覚表現への転換を意図している。映画の中国の農村地域と時代の典型的な風景に対する

視線は、中国の第五世代、第六世代の監督たちを思い起こさせる。第五世代による都市化との闘いに苦しむ農村の人々の描写、そしてこの映画が記録した時期の新興第六世代の監督たちのアマチュアリズムは、スタジオを離れDVで作業を始めた人々も含まれている。しかし、トリン・T・ミンハの立場は彼らとは明らかに異なっている。

1990年代半ばの中国のデジタル化された低解像度の画像は、複数のボイスオーバーとともに、しばしば視聴者を混乱させる。一般的に、トリン・T・ミンハの作品では、音楽とサウンドは単なる背景要素ではなく、ナラティブや映画の構造の不可欠な部分だ。彼女は上映前に、この映画は身体を動員する体験として捉えるべきだと提案しました。それは「聴く目」と「見る耳」を活用するものである。映画では、中国で生まれ育ち、現在はヨーロッパに移住している郭小櫓の声で読まれる彼女の自叙伝『Nine Continents: A Memoir In and Out of China』、カナダに住む単小月の詩を読む声、中国語の語彙の意味を百科事典的に読む中国男性の声、そして監督自身の理論的でありながら詩的な文章を読む声を聞くことができる。これら多様な声の採用は、中国の外縁からの視座を有する監督の独自の位置づけを際立たせるとともに、視聴者に対して新規の視角を提供する。

彼女の以前の中国についての映画『核心を撃て』(Shoot for the Contents) (1991年)では、クレアモント・ムーアをインタビューしている。ムーアはアフリカ系であり、教授でも専門家でもないが政治に精通している人物で、中国の政治について語っている。この映画についてのインタビューで、監督は次のように説明している。「通常、中国に関する作品では、知識の声は内部者——ここでは中国人——または制度化された権威以外のものであることを期待されない。その権威は、中国に関する専門知識を持つ学者で、そのような文化について話す資格を即座に与えられ、その名前と肩書きが画面に重ねられることで、彼または彼女が言うことを正当化する」<sup>3</sup>しかし、山形国際ドキュメンタリー映画祭で『What about China?』が上映された後、ある視聴者は、映画に登場する全ての女性の声と彼女たちが表現する意見が監督からのものだとして誤解した一方で、別の視聴者は、映画が中国を観察するスペクタクルに疑問を呈した。これらのレビューもまた、映画製作者と観客、そしてネイティブと非ネイティブの間のこれらの権力関係の存在とテンションを再確認するようだ。

このレビューの目的は、監督の方法論を擁護したり、映画に登場する記号に単純に意味や道徳的判断を与えたりすることではなく、見るための可能な方法を提案することだ。彼女は政治的な映画を作る以上に、映画を政治的に作っている。このエッセイ映画には、監督の強い個人的表現と理論的实践があるが、監督の声が単一ではなく多声性を持つ集合的主観性として存在していることにも注意を向けたい。トリン・T・ミンハが「speak nearby」というときのアウトサイダーとしての周縁性を理解することは、実際に重要だ。トリン・T・ミンハは、フランツ・ファノンの植民地文化における同化 (assimilation)、拒絶 (rejection)、革命 (revolution) の三段階モデルを採用しつつ、特に最終段階において繊細な深みを加えている。彼女は第三段階を、抑圧者の文化に対して直接的な対決や完全な拒絶を超えた方法、「speak nearby」として再解釈した。<sup>4</sup> このアプローチは、両方の文化との戦略的かつ反省的な関与を強調し、力のダイナミクスと文化的複雑さを意識した対話を提唱している。それは、抑圧者の道具を戦略的に使用して、植民者と被植民者の二元論を超えたハイブリッドなアイデンティティのための空間を育むこと、そして継続的な交渉と批判的反省を促進することだ。非母語話者としての中国系留学生の立場から見ると、この映画は私に強いエンパワメントを感じさせると、ディアスポラとしての視点の確認感を強く響かせました。アウトサイダーであることは、言語の使用やホスト国のローカルな文化参加における習熟度と信憑性のジレンマを常に提起し、しばしばディアスポラ集団の間でアイデンティティ危機を引き起こす。「Speak nearby」は、ディアスポラのアイデンティティの検証と肯定を提唱する倫理と一致している。ベトナム系アメリカ人詩人 Ocean Vuong (オーシャン・ヴォン) の言葉に共鳴して、「僕がこうして書いているのは、“たって”を文の書き出しで使ってはいけなくて教わったからだ。でも、僕は文を書こうとしていたわけじゃない——ただ自由になろうとしていたんだ。だって自由というのは要するに、狩人と獲物との間にある距離でしかないから。」<sup>5</sup>

このイベントを通じて、私たちはトリン・T・ミンハの多分野にわたるアプローチに触れた。彼女は音楽作曲、映画製作、そしてフェミニズム、ポストコロニアリズム、映画詩学への理論的探求を融合させ、現代映画および理論の中で際立った声としての地位を確立している。『What about China?』を含む彼女の映画が、視聴者に

民族誌的ドキュメンタリーの形式を再考させ、ドキュメンタリーで表現された真実に疑問を投げかけるよう促す点は魅力的だ。彼女の映画は、深い内省と対話の触媒として機能し、辺縁での対話の空間を開拓している。

1 | Bauer U. M., Raidel E., Minh-Ha, T. T. “Trinh T. Minh-ha and Ute Meta Bauer in Conversation on *What about China?* In: Postcolonial Futures.” *Moving Worlds: A Journal of Transcultural Writings*. 2021; 20(2): 145–152. 引用部分は長山智香子訳。

2 | Foster, Hal. “An archival impulse.” 2004; *October* 110: 3–22.

3 | Chen, N. N., & Minh-Ha, T. T.. ““Speaking Nearby”: A Conversation with Trinh T. Minh-Ha.” *Visual Anthropology Review*, 8(1): 82–91.

4 | Balsom, Erika. ““There is No Such Thing as Documentary’: An Interview with Trinh T. Minh-ha.” *Frieze Magazine*. 2018; 199.1.

5 | ヴォン, オーシャン.『地上で僕らはつかの間きらめく』木原善彦, 訳. 2021年. 8ページ.